
たんぽぽ

飛六区

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たんぽぽ

【Nコード】

N7668C

【作者名】

飛六区

【あらすじ】

大学生になつた幼なじみ3人の恋と友情を描いた物語

大学生 泰樹と彩音と悟は幼なじみだった中学生の頃泰樹が彩音に告白して付き合う事になったところが大学2年の時ある事件が起こる・・・

5月20日 朝

彩音は布

団から起きた彩音

「時間だ学校行かなくちゃ」掛けて置いた目覚ましがり目を覚ました。そして自転車に乗り学校へ向かっていると 泰樹

「おはよう」泰樹が後ろから追いかけてきた 彩音

「危ないよ 良かったら並んでいこ」彩音はウキウキ気分で自転車のペダルをこぐ。そして二人は並んで学校へと到着した。そして一緒に手を繋いで教室のドアをあけた彩音と泰樹

「おはよう」教室には何名かの生徒がいたが二人を見るなり全員が「ヒューヒュー」と声をかけてきた。二人は照れながらも席についたところが教室には幼なじみの悟がない。泰樹はきになって悟の元彼女の佳奈に聞いた 泰樹

「あれ 悟は一緒じゃないの」佳奈は少し怒ってこう言った 佳奈

「一緒なわけないでしょ私たちわかれたんだから」泰樹は二人が別れたことを知っていたがふざけてこう言った

「えっそうなの？」繰り返してこう言った

「あっそうか悟のやつまた遅刻か」教室のドアが開いた

「おはよう」先生が入ってきた。みんなが席につくと朝礼が始まった。それから数分がたった頃、またドアが開き、「おはようございませ遅れてすいません寝坊しました」頭を下げ悟が入ってきた。先生

「おはよう遅いぞいつもの事だが遅刻するとは危ないぞ後3回遅刻したら留年だぞ大丈夫か？」先生が冗談半分でこう言った 悟

「大丈夫だよ先生今日目覚まし時計買いに行くから」悟は陽気にこう言った 先生

「なんじゃそりゃ」教室中に笑い声が響いた 先生

「ま、いい席につけ授業初めるぞ」いつもの用に授業が始まったそして帰り 彩音

「ヤツチャン一緒に帰ろう」泰樹に声をかけた 泰樹

「おう」泰樹はかつこつけて言った 悟

「熱いね二人夏の暑さより熱いねでも今日は俺も一緒に帰るぞ」
泰樹

「お前な」彩音

「良いじゃないたまには」 泰樹

「そうだな」3人は一緒に帰った そしてしばらくして 悟

「じゃな」悟は家に入った そして二人は一緒に帰った彩音が家に戻ると ソファに寝込んだ その時だチャイムがなった彩音が出てみるとドアの前に立っていたのは母だった彩音

「どうしたのお母さん」彩音はびっくりした 母

「久しぶりぶりね」母がそういうのも無理はない一人暮らししてから長い休み以外帰ってないからだ 母

「実はね心配で来てみたの」 彩音

「心配しなくていいのにもありがと」その瞬間だった彩音は目の前が真っ暗になって倒れた 母

「彩音しっかりして彩音」 彩音が目を覚ますと病院だった 母

「大丈夫」 彩音

「うん大丈夫」 母

「無理しない方がよいよ」母は涙を浮かべていた それというのも彩音が目を覚ます1時間前に 先生

「お母さん娘さんは後半年の命なんです」 母

「そんなどういいう事ですか」先生は病気の事を話した 母は泣きながら彩音のベットへと向かった 彩音

「何泣いてるの？」 母

「ちよつと目にゴミが入っただけ」 彩音

「そうなの？よかった」母は涙を拭くと母

「しばらく入院してって」 彩音
「え、そうなの」 彩音は残念そうに言った 母
「大丈夫すぐに退院できるから」 彩音
「ならよかった」 母は余命半年ということは娘にはつげなかった 母
「そろそろ帰るね」 母は病院を後にした そして夜はふけていった
そして次の日 彩音
「やばい寝坊した」 彩音は慌ててベッドから起きたそしてすぐに病院だときずき 彩音
「あ そうだったアタシ入院したんだ」 彩音は再びベッドに寝込んだその時だ泰樹が病室に入ってきた 泰樹
「彩音大丈夫か」 泰樹は心配そうに彩音に近づいた 彩音
「大丈夫だよそれより学校は」 泰樹
「彩音が倒れたって聞いて心配で行ってられるかよ」 彩音
「馬鹿ねでもありがとう心配してくれてでも大丈夫だよすぐに退院出来るって」 泰樹は彩音の母に全てを聞いていたが余命の事は彩音に話してないと泰樹に打ち明けていた 泰樹
「ならよかった」 彩音
「大丈夫学校早く戻った方が良いじゃない私の事は心配しなくていいからさ」 泰樹
「そうだな悟みたいになったらやばいもんな帰るね」 彩音
「うん ありがとうバイバイ」 泰樹
「あ そうだこれお土産」 泰樹がカバンから取り出したのは花束だったその花束とは二人が初めてあつたたんぽぽ畑からとってきたたんぽぽだった彩音
「ありがとう」 泰樹
「それじゃまた」 泰樹は病院を後にしたそして家に帰ると泰樹は涙を流したそして1時間ほど泣いた涙が渴れるまで そして涙を拭くと学校へと向かっていった

学校で

悟

「彩音大丈夫だった？」悟は心配そうに言った泰樹は迷ったが泰樹

「大丈夫だよしばらく入院するけどすぐに退院出来るってさ」悟
「そうなのよかった」泰樹は初めて悟に嘘をついた

次の日

彩音が目を覚ました

するとそこには悟の姿があった彩音

「どうしたの悟」悟

「今日学校休みだからさ見舞いにきた」彩音

「心配しなくても大丈夫なのに私大丈夫だよ

悟

「心配なんてしてないよ」悟は照れながら言った続けてこう言った
悟

「俺実はさ中学生の頃からさ」少しつまたがすぐに

「彩音の事好きだったんだ」それは突然の事だった彩音は戸惑ったが
彩音「ごめん やっぱりね泰樹と離れたくないんだ」

悟

「何言ってるんだよ冗談じゃないか」悟は苦笑いを浮かべた 悟

「元気そうだから帰るよ」そう言って病院を後にした 悟は泣きながら家へと帰った
それから2ヶ月後

彩音

「お母さんまだ入院しなけりやならないの」母

「先生がさ1週間で退院だった」彩音

「良かった」そして彩音は退院したしかし病院通いになるのであ
った
そして1週間後久しぶりに学校

へきた

彩音

「おはよう久しぶり」先生

「おはよう久しぶり」彩音は席についた 泰樹

「おはよう久しぶりもう大丈夫なの」彩音

「先生が大丈夫だってでもしばらく病院通いになるけどね」それ
から半年後彩音は旅立って言った彩音は最後に泰樹にこう言った

彩音

「また生まれ変わったら泰樹のお嫁さんになるね少し離れてるけど」
それを言ったあと眠りについた

それから1ヶ月後

泰樹は彩音の墓の前に立つと 彩音の墓の横に一輪のたんぽぽをおいた 泰樹

「さよなら」泰樹は墓の前で泣いた涙が渴れるまで

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7668c/>

たんぽぽ

2010年10月8日15時19分発行